

小説

風 樹

風樹とは、すでに死んでしまった親を思う気持ちという
『精選版日本国語大辞典』より

ゆとろ 満

「風が哭ないている」

そんな声が東彦はるひこを目覚めさせた。しかし、風はなく、夜の静寂がひしと満ちているだけだった。

東彦は、粘ついた目をこすりながら枕元のスマホに手を伸ばした。画面の時刻は午前一時五分を示していた。

「水くだしやあい。水くだしやあい」

隣室のベッドに臥せっている母の声であった。ヒューと喉笛を鳴らすような悲しげな声で、これが眠っていた東彦には風の音のように聞こえたのだろう。

袖がめくられてむき出しになった腕がぞくぞくとした。東彦

剥がすように起き上がった。体温が開いた襟首から競うように脱けだしていく。東彦の身体がぶるぶると震えた。

東彦は「おおっ、寒」と言いながら居間の戸を開けた。

そして、炬燵の上に置いてある吸呑みを持つと台所へ向かった。飼猫のトラが、「ミャーン」と鳴き声を出しながらこたつから出て来た。そして、東彦のくるぶしに頭をこすりつけながらゴロゴロと喉を鳴らした。「トラごめんよ、起こしちゃったか」と言いながら東彦は台所の床に足を踏み入れた。その瞬間、「しゃっこい」と声を上げてしまった。床板は素足がしびれるほどの冷たさであった。東彦は爪先立ちになりながら吸呑みに水を入れた。

東彦が実家を離れて神奈川県に住むようになって、既に四十五年が経っていた。それでも仙台駅頭に降り立つと、まるでテレビのチャンネルを替えるようにあつという間に仙台弁に転ずる。それがまた心地よく、舌の動きまで軽やかに思っていた。東彦は、素直に「故郷はありがたい」と思うのだった。

「かあちゃん、水持って来たよ。ゆっくり飲んでよ」

東彦は吸呑みの先を母の口元に持っていった。光を落とした蛍光灯の明かりが母の顔をやわらかく包んでいた。母の部屋はほのかに暖房が利いている。突然、母の顔に陰が

はあわてて布団の中に腕を引つ込め「仙台の一月は寒いな。こんなに寒かったっけ」と小首をかしげた。

母の「水くだしやあい」という細い声は間断なく続いた。東彦はその声に「かあちゃん、もうちよつとだけ待って下さい。すぐいぐがら」とつぶやいた。しかし、身体は母の声に背くように寝返りを打っていた。

「水くだしやあい。水くだしやあい。玲子さん、お願いしまあす」

母の声は、娘への哀願と変わっていった。さすがに東彦は堪えきれず、「よいしよ」の掛け声と共に布団から身を

走った。そして、顎を動かし吸呑みを拒もうとしている。

「おめえはだれや」

凄味を含んだ声だった。思いがけない母の言葉に、東彦の表情はこわばった。

「東彦だっちゃ。忘れてしまったの」

それは痴呆がさせているものだと思ひ直し、東彦は笑顔をつくった。しかし、その笑いはぎこちなかった。

「ほんどのハルシコが（本当のハルヒコか）」

さらに問い詰めるような母の口調であった。細く、険しい目が東彦をじっと見据えている。普段の、口に物を入れたような不明瞭な言い方とはまるで違う。元気な頃の強い口調に戻っていた。東彦はむっとなつてしまい、まともに母に向かつてしまった。

「んだっちゃ、本物の東彦だべっしや、由美ちゃんの大事な一人息子だよ」

語調が強くなっていた。

しかし、母の険しい表情は、あつという間に消え、むしろ和んできた。

「ほうが、いづ来たんだ」

母は、東彦を息子と認めたようだった。感情の起伏が激しいのも母の病状の特徴であった。

「二日前だよ。ちゃんとお墓参りもすて来たがら安心すてけさい。かあちゃんの分も拝んできたがら」

東彦は意識的に「かあちゃんの分も」と添えた。

案の定、母の表情はさらに穏やかなものへと変わっていった。多くの記憶が失われても、先祖の供養を大切にすることを気持ちはまだしっかりと残っていたのだ。

母が臥してからもう十年が経っていた。床に就いたきっかけは転倒による大腿骨の骨折であった。旅行先のホテル玄関前で転んだのである。年齢のせいか骨のつきが悪く、思いの外の長期入院となってしまった。その間、急速に筋力が低下し、体力も衰えていった。けがをする前は一月おきほどに旅行を楽しみ、家事も問題なくこなすほどの元気さであった。それが入院を契機にこれらのことが出来なくなってしまうた。結果、独身の妹に一切の負担がかかることになった。さらに寝たきりの状態が続くうちに記憶力や判断力、そして理解力も低下していった。痴呆が始まったのである。

母は東彦が差し出した吸呑みをくわえると、ゴクンと喉を鳴らして水を飲みこんだ。と、口の端から水がだらだらとこぼれた。東彦の急ぐ心が加減なしに母の口に水を入れてしまったのだ。

「さい。明かりはこのまんま点けておぐがらね」

「それと」と言いかけて東彦は口をつぐんだ。「話しても無駄なのは」と一瞬ためらったのだ。しかし、自身にも言い聞かせるようにゆつくりと言葉を継いだ。

「かあちゃん、三月にフィリピンのマクタン島とオランゴ島に行ってくるがら。現地の子どもたちに文房具をプレゼントをするためのしゃ。それじゃゆつくり休んでけさい」

母が息子のフィリピン行きを聞いても何の感慨を持たないことは、東彦には重々承知のことであった。しかし、だからといって黙って行くのは何やら人情味に欠けるようであり、後ろめたくもあったのだ。実は今回、東彦はこのことを母や妹に伝えるつもりで来たのだ。万一母に何事かが出来した時に、長男に連絡がつかないでは家族の面目が立たないだろうとおもんばかったからであった。東彦は少し肩の荷が下りた気分になった。また、母の看病を一手に引き受けてくれている妹の玲子にも申し訳が立つだろうとも思った。

「うん」と母は素直に頷いた。東彦はそっと母の手を握り、そして、その手を布団の中に入れた。元気だった頃の母の手のふくよかさは消えていた。しかも、その手は小さく縮

「あつ、ごめんすてけさい。大丈夫すか」

東彦は慌てて枕元のティッシュを取ると、母の口元を拭いた。そして「もう少し飲む」と聞いた。

「んん、もういいっちゃ」

母はそれほど喉が渴いていた訳ではなさそうだった。恐らく夜中に目を覚まし誰もいないことに気付き、人恋しくなって「水」と叫んだのだろう。

気丈だった母が次第に幼児化し、時には息子と他人の区別ができなくなってしまうこともあった。そんな母を見る度に東彦は寂しさを覚えた。また、まるで人格が豹変したかのように誰彼と無しに口汚く罵る事さえあった。そんな時、東彦は母の病を憎くみ、また悲しくなった。

「玲子ちゃんはどうすたの」

母は何かを探すようにきよるきよると目を泳がせている。目の前にいる息子ではなく、娘を探しているのであった。

結局、母の最後の頼りは娘なのであった。終日手厚い介護をしてくれている娘である。母が娘に縋り付くのは当然と言えば当然であった。親子関係がすっかり逆転してしまっていた。

「玲子ちゃんは寝てるっちゃ。まだ夜中の一時半だがら、みんな寝ているのっしゃ。かあちゃんもおどなすぐ寝てけ

んでもいた。弾力を失った皮膚のたるみとごつごつとした細い骨の感触だけが東彦の掌に残った。

三月のマクタン島は乾季である。灼熱の太陽光線が容赦なく降り注ぐ。だがこれも例に漏れず異常気象で、乾季とこの日に雨季特有のスクールが時折襲って来ている。

この日、東彦は早朝のスキューバダイビングを切り上げると、そのまま同行の浜田と共にバンカーボートでオランゴ島の栈橋へと向かった。島のスバ村の子どもたちへの支援のためであった。

バンカーボートはダイビングや近場の島の移動手段として使われており、フィリピンでは大変ポピュラーな船である。細めの船体にアウトリガーというアメンボの足のようなもの突き出ている。節を削った竹が船体に平行して一本ない二本ついている。このおかげで船体の揺れが少なく、安定感が増している。

東彦のスバ村訪問は、今回で五回目であった。村民への連絡は、ダイビングインストラクターのデイノがやってくれていた。デイノは、この村に住む彼の伯父に準備などの手配を依頼していた。デイノと東彦との付き合いは既に十年を超えていた。

スバ村は、マクタン島の東五キロメートルほどに浮かぶ小さな島である。沖から見ると板を浮かべたような平たい島で、島全体がヤシの木で覆われている。ゆつたりと時間が過ぎる静かな島で、観光客は極めて少ない。

デイノの伯父の家はまばらなココヤシの中にあつた。このヤシの途切れた先がマングローブの林である。その林の先、遙か南方にボホール島、北東にレイテ島が薄青くもやつて見える。ヤシの下の地面は細かな砂でひんやりと冷たく、素足には殊の外心地よかつた。ヤシの木陰に入ると海からの風が涼しく、そして、やさしく頬を撫でる。熱帯とは思えない快適さである。日向での射すような光も嘘のように柔らかなになる。東彦の表情が自然にゆるんでいった。

車などの騒音はほとんど聞こえてこない。音らしい音と言えば時折聞こえる鳥や放し飼いのヤギの鳴き声、そしてヤシの葉を鳴らす風の音だけである。時間が眠そうに過ぎて行き、せわしくなく働く村民は一人もいない。ここでは馬車馬のごとく働く者も、またそういう言葉も存在しない。どこまでも透き通る青い空と純白な雲、そして体を吹き抜けていく風があるだけである。時折引き込まれるような静寂が訪れ、心を清らかにしてくれる。

しかし、このオランゴ島にも悲劇があつた。太平洋戦争

ぼつんとヤシの木にもたれている老婆の姿が東彦の目に入った。先程杖を突いていた老人であつた。見たところ九十歳は越えているかと思われた。顔に刻まれた幾筋もの深い皺、手の皮膚はたるみ、骨が浮いていた。チョコレート色の肌はつやがなく、頭髮は白髪で薄く汚れていた。着ている服はどこどころにシミがあり、全体に黒ずんで元の白さは失われていた。尋ねると、子どもは十二人、孫の数は分からないと言う。生まれた正確な年も知らず、年齢は八十歳ぐらいだ、と言つた顔には、はにかんだ笑みがあつた。

「ハッピーですか」と問うと、「ハッピーだ」と笑顔いっぱいであえてくれた。笑顔の中の瞳は白く濁つて、焦点が定まらないように見えた。しかし、その目は静謐で慈愛に満ちているように東彦には思えた。

東彦は母を思った。そして、母は果たして幸せなのだろうかと自問した。問えば恐らく母は黙するだけと思われる場合によつては、「早く父さんのところへ行きたい」と答えるかも知れない。

母は公共の介護と娘の手厚い看護を受けて日々を過ごしている。週二回の入浴サービス、月に一度の医師、看護師の訪問、さらには薬剤師が薬を届けながら相談にも乗つて

時、日本軍が占領した。そのおり奮行があつた。そのひとつが赤子を空中に放り上げ銃剣で刺し殺したことである。この事実をデイノの口から聞かされたのは付き合ひ始めてから五年も経つてからのことであつた。彼は済まなような表情で「ごめんね。でもこれは本当のことです。みんなが知つてゐることだから」言つた。「謝るのはおれたち日本人のほうだよ。でもよく話してくれたね」と、東彦は言つた。そして、デイノは自分を信頼しているからこそ話してくれたものと確信した。これを契機に二人の友情は更に深まつた。

伯父の家の近くには、既に百人ほどの人だかりがあつた。子どもたちだけと思つたら主婦や老人までいた。小さな子どもたちはヤシの下で追いかけてこをしたり、また、ボール蹴りに興じたりしていた。女の子たちはおしゃべりに余念がない。その中には乳飲み子を抱いた母親や杖を突く老婆も混じつていた。

伯父の家人たちにも手伝つてもらい、文房具などのプレゼントはあつという間に配り終えた。品物を手渡すと、子どもたちは顔を上げ「サンキュー」と言つてほほえんでくれた。中には、はにかんで何も言葉を発しない子もいたが、そういう子でも膝を折り、頭を下げて感謝の気持ちを表わしてくれた。

くれる。その上、月に二回、三日間ほど施設での宿泊サービスまで受けている。常に清潔な寝具に包まれ、顔色もよい。しかし、天井からは栄養剤が入つた点滴の瓶が吊り下がっている。この栄養剤は胃瘻を通して胃の腑に十分な栄養を届け、母の命を保障してくれている。その代わり、母は食を味わうという大きな楽しみを失つてしまつていた。また、寝たきりの状態である。こんな母に「幸せか」と問いかけるのは酷なことである。それでも東彦は母に尋ね、母から「お陰で幸せでがんす」という返事を聞きたいと思ふのである。母が逝つた後、その言葉は東彦や妹たちを安堵させるに違いない。言葉こそが最大の証、と東彦は信じるからである。

「仙台の寒い時期だけでもこのオランゴ島に避寒させたらどうであろうか」。ふと東彦の脳裏に浮かんだ。直射日光を避け、ヤシの木の下に簡易ベッドを置き、ゆつくりと半日を過ごす。時折ベッドから半身を起こし、海を見る。適度の湿気を含んだ海洋性気候の風は肌に優しく、心のマッサージも兼ねてくれるはずである。そして、たまには村の年寄りたちに来てもらひ昔話をする。お互ひ言葉は通じなくても母にはこの地の年寄りたちの優しさ、いたわりが心に染み入るに違いない。

こんな話を母にしたら「なあにあっぺとっぺ（とんちんかん）なはなすつこすてんだ」と一笑するのがせいぜいだろう。分かりきった母の返答を思うと、「おしよすくて（恥ずかしくて）とても言い出せないな」と思わず東彦は苦笑をした。

「ハルヒコさん、そろそろ帰りますか」

東彦の空想を破るかにようにデイノが声を掛けて来た。

「今何時？」

「二十十分。天候にもよるけれど、これから棧橋に行けばマリバゴには三時半頃に着くね。ちょうどよい」

東彦の問いに、デイノが笑顔で応えた。

マリバゴは対岸に見えるマクタン島ラプラプ市内の地区名である。船着き場に隣接してデイノのダイビングショップがある。

「そうすると日本は今、三時十分か。桜前線はどこまで来ているのかな」

ふと東彦は日本のことを思った。

その時であった。東彦のケイタイの着信音が鳴った。メールの着信音である。マクタンに来て以来、ケイタイはほとんど使っていない。「誰からかな」と思いながら開くと、友人の白木からであった。

「大地震が発生、マグニチュード8・4。現在厚木近く。車は大渋滞で動きません。仙台が大変です」

白木には今回の旅行のことは話してあった。情に篤い白木はわざわざ連絡をくれたに違いない。

「マグニチュード8・4。まさか、嘘だろう」

東彦は思わず声を出してしまった。突然の日本からのメールで、しかも大地震を伝える内容である。東彦は信じられない気持ちであった。というより信じたくなかった。そして「仙台」と言う文字が目が釘付けになった。それを凝視している東彦の身体がカッと熱くなっていった。

「浜ちゃん、日本が大変らしい。大地震だつて。今、白木さんからメールが入ったよ」

「震源地はどこ。震度は」

不安な声で浜田が畳みかけて来る。

「はっきりしないけど、どうも東北地方みたいだよ。しかも震度は7だつて」

「震度7」

浜田は「な・な」と大声を上げ、「あ」を長く伸ばした。浜田の顔がサアツと青ざめていくのが分かった。彼の実家は福島市内にあった。その上、座間市の自宅には妻が一人で留守番をしている。

「座間は大丈夫だよ。問題は東北地方だね。仙台が大変だ、とあるから」

浜田は、声も出さず「うむ」と唸るように頷いただけであった。

東彦は、三十三年前の宮城県沖地震を思い出した。

その地震で、東彦の実家は古い家と建て増した分が一メートルほど分離してしまった。屋内は、襖を始め廊下のガラス戸などの戸という戸は全て外れ、その多くは吹き飛ばされた状態であった。戸棚などに収納されていた食器の大部分は落下し、割れてしまった。床に置かれた冷蔵庫は室内を走りあらぬ場所に移動し、テレビは横倒しになった。昔ながらの厚い塗り壁の多くは剥がれ落ちて床に散乱し、竹の骨組みをさらけ出していた。柱の幾本かはねじ曲っており、地震の強烈なエネルギーを示していた。床は足の踏み場もなかった。目を外に転じれば瓦の大部分が落下し、軒下に散乱していた。さらに屋根の棟が波打っていた。目も当てられない無残な状態であった。飼った猫のチャコは飛び出したきり一週間も帰って来なかった。猫さえも恐怖におののき、平常心を失ったのである。結局、家は建て直すほかなかった。この時父は五十七歳で既に退職し、ある職員寮のボーイラーマンとして働いていた。多少の退職金の蓄

えがあったとしても、日々の生活はぎりぎりであったはずである。この時、国からの支援は、住宅建築資金借入金利息の一部補助だけであった。

「まさかあの時の宮城県沖地震より強いはずはないだろう」

東彦は自身に言い聞かせるようにつぶやいた。そして、「強かったら実家は倒壊だ」と口に出そうとして飲み込んだ。

逸る気持ちを抑えながら実家の固定電話の番号を押した。着信を知らせる音が響いている。「繋がっている」と、東彦はほっとした。そして「早く出て、早く出て」と心の中で叫びながらケイタイを耳に押しつけた。しかし、呼び出し音はいたずらに鳴るばかりであった。東彦は二度、三度と掛け直した。だが、三度目にはツーンという通話不能の音が無情に返ってくるばかりであった。

「倒壊家で圧死」という文字が東彦の脳裏をかすめた。しかし、東彦はかぶりを強く振ってその不吉な言葉を追い払った。そして「きつと避難しているに違いない」と言い聞かせた。

「電話が繋がらないけど、浜ちゃんの方はどう」

「こつちも同じ。メールはいいけど通話はだめだよ。とこ

ろで震源地はどうやら三陸沖らしい。津波も発生し、死者も相当な数みたい。それに、福島原発も津波に襲われたらしい」

浜田の妻からのメール内容であった。

「原発が津波に襲われたあ」

東彦は驚きを隠しきれず大声をだして浜田を見やった。

「それがほんとだったら大変なことだよ。チェリノブイリの二の舞になるかも。そうなったら福島には人間が住めなくなるんじゃないか」

東彦の言葉に怒気が込められていた。東彦は直ぐに「しまった」と後悔した。いたずらに浜田の不安を煽るだけだと思ったのだ。

「そうだね」

浜田はうつむいたまま力なく頷いた。彼の実家には両親が住んでいる。当然ながら両親の安否が頭をよぎったに違いなかった。

「直ぐに実家に連絡しないと」

浜田の声は低く、冷静を装っているように東彦には聞こえた。

「両親はきっと大丈夫。それに福島市は津波が届かない地域だから心配ないよ」

たのであった。間を置かずにもメールの着信音が鳴った。「おれと姉は大丈夫。母は未確認です。仙台は結構大変、電話したけど繋がりません」

長男の啓からだった。啓もメールであった。やはり電話は不可能な状態であることがはつきりした。しかし、東彦たちにとってメールでのやり取りが可能であることは、せめてもの救いであった。

東彦は啓に、母親が無事に伊豆に着いたことを知らせた。そして、仙台の実家に連絡を取り、何か情報を得たら折り返し連絡をくれるように頼んだ。メールの書き込み字数の制限が一段と厳しくなり、東彦は文面を二回に分けて送信した。

「浜ちゃん、今、娘からのメールだけど成田が閉鎖だった。困ったな」

「えー、本当、まいったな。ということは、セブ空港からは成田行きが飛んでいないってことだよ。おれたち三日後の便でしょう。帰れるかね」

「浜ちゃん、こうなったら幸運を祈るだけだね。とにかくお互いの自宅の無事は確認できたので取り敢えずは安心だ。問題は福島と宮城にあるお互いの実家の状況確認、それと成田便だね。そのためには情報を集めることだ。ホテルへ

「そう思うが、やはり確認が取れるまでは心配だから」

東彦には浜田の気持ち痛いほど理解できた。同時に東彦も妻のことが心配になった。浜田の声に押されるように東彦は「妻に電話しなくちゃ」と言っただけで、「あつ、妻は伊豆だ」と思い出だした。彼の妻は陶芸家で南伊豆の山中に窯場を持っていた。この日、妻はこの窯場へ行くことになっていた。しかも、そこは携帯電話の電波が届かない区域であった。東彦は彼の自宅隣のアパートに住む娘の桜に、「父の家と桜たちの様子を知らせて」というメールを送った。地震のせい、通話は不可能でメール通信のみが可能な状態になっていた。しかも、メールへの打込字数が制限され始めて来た。直に桜からの返信が来た。

「宮城県は通話規制中でおばあちゃんたちの消息はつかめず。実家、それに私たちには被害なし。成田空港は現在閉鎖中」

娘のメールを読み終えると、直ぐにまたケイタイの着信音が鳴った。妻からだった。

「今、南伊豆町に着きました。仙台の実家が大変みたいです。津波などの被害が出ています。電話は全く通じません」

妻は窯場に近く前に地震の情報を得て東彦に連絡をくれ

戻ったらすぐテレビを見よう」

棧橋に立つと風の強さが急に増して来た。東彦の帽子が飛ばされそうになった。東彦は慌てて帽子を手で押さえた。南の方を見ると、灰色の雲がカーテンのように海面まで厚く垂れ下がり、水平線は、もやっとはつきり見えなかった。東彦はスクールに見舞われているに違いないと思った。

棧橋からボートまでは幅二十センチほどの板が渡されているだけであった。東彦と浜田は、揺れる渡し板を慎重に踏みしめながらバンカーボートに乗り移った。船上から海面を眺めると、波は陸地から見た以上に高く、千切った真綿をまき散らしたように白波が立っていた。「これは揺れるぞ」と東彦は誰となく言った。案の定、小さなバンカーボートは揺れに揺れた。船長はエンジンをふかしたり落したりと、懸命に高波と戦っていた。船の揺れには強い東彦は船の前方に直立し、到着地であるマクタン島をじっと見続けた。船の揺れにに応じて足にかかる重心を移す。そのリズム感が東彦には快感であった。晴れならばマクタン島の高層ビル群の一つひとつが識別できた。しかし、この日の天候のように視界が利かない状況ではその影すら見えなかった。船が波を切るたびに飛沫が東彦の全身にかかって

きた。しぶきの冷たさが東彦を責めているようだった。海上に出たせいかメールのやり取りができなくなってしまうた。

「母と妹が無事であるように」

東彦は、飛沫で濡れた顔を両手で拭いながら祈った。だが、頭上の灰色の雲のような不安が胸の中で膨らむばかりであった。灰色の空を見上げながら東彦は、実家のことに思いをはせた。

実家の目の前には、東彦の母校でもある小学校がある。余震を避け、そこへ二人で避難しているのかもしれない。連絡がとれないのはそのためであろう。きっとそうに違いないと東彦は自身を納得させようとした。避難となれば、寝たきりの母親については懇意にしている隣家の大木さんが救いの手を出してくれるに違いない。だが、と東彦は思い返す。避難先だっただこまで安全かわからない。さらに、その大木さんが被災していれば援助も無理だろう。遠くにいる者の常で、東彦の考えは悪い方へ、悪い方へと傾いて行くのだった。ざわつく胸を抑え込むように、東彦は船板の上の足を強く踏みしめた。そして目を凝らし、前方を見続けた。風が次第に強くなり、船は横揺れ、縦揺れをし始めた。

の手すりを強く握りしめ、揺れに抗っていた。そして、自然の猛威の前での人間の無力さを思い知った。

「ダイジョウブ、ダイジョウブ。モンダイアリマセン。スグヤミマス」

デイノは東彦たちの不安を知ったのか、いつもの楽天的な調子で声をかけて来た。デイノのこのラテン系の陽気さが東彦たちの心を落ち着かせてくれた。

「もう乾季ですからスコールはないはずですが、最近の天候はおかしいです」

「うん、日本も同じだよ、デイノ」

浜田が叫ぶような声で返した。

デイノの言うとおりであった。スコールは三十分ぐらいで嘘のように去った。そして、青空をのぞかせた灰色の空が船を追いかけるように現れた。しかし、船は依然として波に揉まれたままであった。海は空ほどに回復は早くないのである。結局、船は大幅に遅れてマリバゴに着いた

東彦たちの宿泊しているアネモネホテルは宿泊費が格安で、ダイビングショップに近いだけ取り柄であった。建物は相当年数が経っており、備え付きのエアコンの騒音はひどく、冷房効果はほとんど認められなかった。シャワーは温水と言いながら、ほとんど水であった。その上、テレ

風が雨を運んで来た。雨粒がポツリと東彦の頬を打った。雨滴はたちまち篠を突く雨となって船を襲ってきた。瞬時の間のことであった。風を含んだ雨は波しぶきと相まって、四方八方から船に降り注いで来た。まるでシャワーのようであった。屋根に当たる雨音が、ほとほと太鼓の乱れ打ちのような音を立てている。

「やはりやって来たか」と、東彦は思った。

どうやら東彦の不安が的中し、スコールが襲って来たのだ。東彦は立っていることが難しくなってきた。

さらに一段と風は強まった。屋根のテント地がバタバタと煽られている。とうとう東彦たちは我慢できず三畳ほどの船室へ避難した。甲板下の船室は、充滿した湿気で胸がつまるほどであった。島影も水平線も全く見えず、うねった三角波が次から次へと押し寄せ、船の行く手を遮えぎっていた。船長は船速を極度に落とし、波を見切りながら船を進めていた。しかし、木の葉のように揺れる船は、波に翻弄されるままであった。その上、雷鳴さえ聞こえて来た。船に当たる波の音が重く、ずしりと東彦の腹に響いて来た。強風は船の前進を遮り、船を軋ませ、その軋みがまるで悲鳴のようであった。船が波に乗り上げると前方の海面は見え、空しか見えないことがしばしばあった。東彦は船室

じまでも旧型であった。

東彦は浜田と共に部屋に入るや否やすぐにバスタオルで身体を拭き、そしてテレビのスイッチを入れた。しかし、どのチャンネルを回しても日本の大地震のニュースはなかった。タガログ語での番組ばかりであった。衛星放送の受信契約がなされていないのである。東彦たちは互いに文句を言い合ったが、それで事態が好転する訳でもないことは二人とも百も承知のことであった。いつしか二人を沈黙が覆ってしまっていた。

「夕方六時になったらニュースがあるかも」

ややしばらくしてその沈黙を破るように浜田が笑顔を取り戻しながら言った。

「そうだね、浜ちゃん。今五時だからもう少しだ。その間にシャワーを浴びよう」

浜田は東彦の言葉を聞くと、「じゃあ、後で」の言葉を残し自室へ戻った。

東彦はすぐにシャワー室へ入った。海水でべたついた身体に冷水が気持ちよかった。身体を拭きながらシャワー室から出ると、着信音が鳴っていた。東彦は慌ててバスタオルを腰に巻くと、ベッドの上のバッグの中に手をつまんだ。慌てているせいか音は聞こえるのだが、ケイタイの在

りかになかなか手が行かない。そのうちにバスタオルがゆるみ、パタリと足下に落ちてしまった。しかし、東彦はそんな事を気にも止めずケイタイを探り続けた。ようやく手にして開くと、娘の桜からであった。

「仙台の由香ちゃんと連絡が取れました。由香ちゃん一家も美穂おばさん一家も無事、ただおばあちゃんと玲子おばさんとは連絡取れず」

東彦は二番目の妹の美穂や美穂の一人娘の由香の無事を知ってほっとしたものの、母と上の妹の所在がつかめない知らせにがつくりとってしまった。

東彦は「やつぱりだめか」と声にならない声を出した。やるせなく、悔しく、悲しい気持ちごとく押し寄せて来た。そして「一月の帰省の折、母親にもう少し優しい言葉をかけ、いたわっておくべきだった」と、悔やんだ。

直ぐにまたケイタイの着信音が鳴った。やはり桜からであった。

「由香ちゃんからです。由香ちゃんのお父さんが玲子おばさんの無事を確認しました。小学校に避難していました」

それを読んだ東彦は「ふうっ」という安堵の声を漏らした。こわばった身体が急にゆるんで行くようだった。しかし、依然として母親の消息についての知らせがなかった。

まった。見る間に津波は高さを増し、膨張していく。そして、あつという間に堤防を越えてしまった。漁船が木の葉のように揉まれている。その漁船は見えない綱で吊り上げられたように船首を高々と上げ、堤防に押し上げられた。とみるや、船首を真下に向け、どつと落下していった。船は堤防を越えた濁流に巻き込まれ、こまのようにくるくると回転している。それでもなんとか持ちこたえて浮いている。波に抗い、必死に生きようとしている。東彦は船がまるで生き物のように思えた。思わず「がんばれ」と声を出してしまった。

どす黒い水が怒濤のように広場に殺到していく。水位はみる間に上がり、駐車していた車はいとも簡単に濁水に包まれ、転がされ、押し流され、そして、急流に飲み込まれていく。建物も腰がへし折れるように崩れ落ち、粉碎され、藻屑となって濁流の中に消える。まるで巨大なミキサーで砕かれているようであった。一瞬、窓から手を振る人影らしいものが見えた。しかし、確認する間もなくその建物もまた流れに押し込まれ、掻き消えてしまった。心血を注いで造り、多くの思い出が詰まった建物がいとも簡単に瓦礫と化して奔流に飲み込まれる様は、悪魔の所業としか東彦には思えなかった。むごすぎると叫んだ。

不安は高まるばかりであった。

その不安をさらに増すメールが桜から届いた。それには「おばあちゃんはショートステイ中で確認が取れず」と記されていた。母の入所先は仙台平野の南部、太平洋に面した井土浜から二キロほど奥にある。田園の中にあるコンクリート三階建ての頑丈な施設で、まだ新しい。施設からは松林が見え、波の音も聞こえる。海まではそう遠くはない。「連絡が取れない」ということは津波に襲われたことなのか、それとも単純に電話回線が不通のためか、一番肝心なことが記されていないかった。東彦はもどかしい思いでその旨を娘に送信した。しかし、なかなか返信がこなかった。いらいらしていると浜田が部屋に入ってきた。六時少し前であった。几帳面な浜田らしかった。浜田は直ぐにニュース番組のチャンネルを探し当てた。

そこには津波のシーンが画面一杯に映し出されていた。遠い水平線が少し盛り上がり、それがそのままゆっくりと河口へ押し寄せて来る。河口から川上に向かう水位が見る間に上がっていく。堤防と平行して道路が走っている。道路は堤防より一段と低い。その道路をまだ車両が行き交っている。「早く逃げろ、何しているんだ」という怒鳴り声が画面から聞こえる。東彦も思わず「早く」と、叫んでし

「あつ、あつ」という叫び声、悲鳴だけが幾度も幾度も画面から流れて来た。それは東彦の叫びでもあった。東彦の身体は硬直し、手はこれ以上ないぐらいに握り締められていた。

思考が止まり、頭の中を黒い津波だけが動画となって流れていた。その津波の濁流に母が浮き沈みしながら消えていく、そんな光景が見えたような気がした。「馬鹿な」と東彦は胸の中で叫んだ。それはやはり幻覚であった。東彦はその幻覚を追い払うように拳で頭を打った。だが、その忌むべき光景は脳に焼き付いてしまったのか、いくら振り払っても消えない。それどころか津波が施設を襲っている光景までが浮かんでくるのだった。

東彦は、母の滞在日とこの大地震の日が重なったことの不条理さに怒りが湧いて来た。そればかりではなく地震と津波への憎しみも募っていた。東彦の握りしめた拳の四つの関節がくつきりと浮かび上がっていた。

「おふくろが危ないみたい」

東彦は震える声を抑えながら浜田に伝えた。

「ツ・ナ・ミ」

浜田は遠慮深げに、小声で間を置きながら聞いて来た。

「うん、たぶんね」

東彦の声は虚ろであった。浜田と東彦の間に沈黙が流れた。

その時、外でシャーという辺りを圧するような音が急激に近づいて来た。またスコールが襲ってきたのだった。突風にあおられたヤシの木がギシギシとなり、横殴りに吹かれた葉がぶつかり合いカシヤ、カシヤという金属音を立てていた。庭に置いてあった器物が飛ばされ、壁に当たる高い音が響いて来た。東彦は外の様子になりながらもテレビの画面から眼を離すことはできなかった。

画面には惨状が、これでもかこれでもかというように次から次へと映し出されている。すでに津波は大河となつて全てを覆い尽くしていた。黒い濁流に押し流されている朽ちかけた建物が火を噴いている。まるで燃えている水に浮いているようであった。信じられない光景が次々と東彦の目の前に現れている。その上、横なぐりの雪がこれでもかとばかりに吹いている。この世の有様にしてはあまりにひどすぎる、あまりにもむごすぎる。東彦は胸を掻きむしる思いで画面を凝視し続けた。

待っていた桜から着信があった。

「おばあちゃんのステイ―先の施設、ツナミ」

それを目にした途端、東彦は絶句し、天を仰いだ。仰い

だその喉奥から「おふくる」というひしゃげた声が絞り出た。

東彦は浜田の視線から逃れるようにして窓に向かった。そして、手のひらで目頭を拭いた。窓ガラスに東彦の顔がゆがんで映っている。まるでムンクの「叫び」のような顔であった。

窓に当たる風がますます強まって来た。風に吹かれ、雨に叩かれ、波のように激しく揺れているヤシの葉が、影絵のように黒く窓に映っていた。車軸のような雨音が辺りを轟かしていた。

「かあちゃん、がんばってくれ。頼む、生きていてくれ」

東彦は窓に映る己の顔に向かって祈った。